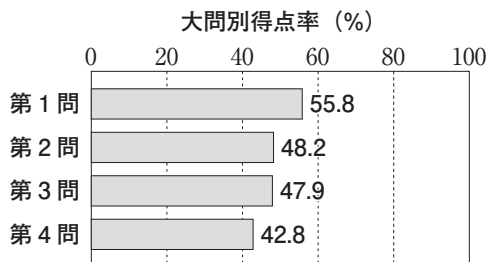
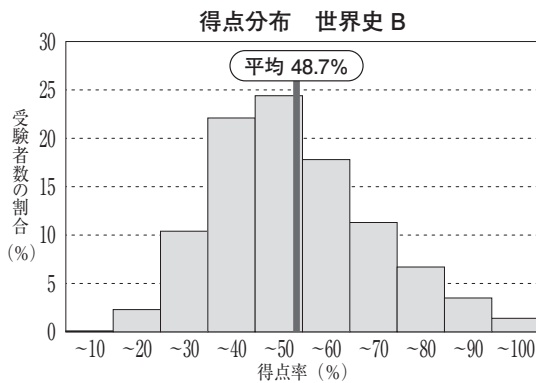


世界史 B

近現代史と周辺史の学習を着実に進めよう！

I. 全体講評

今回の平均点は 48.7 点で、前回（第 2 回 4 月センター試験本番レベル模試）の 42.6 点から順調な伸びを見せた。ヨーロッパ史と中国史、古代西アジア、古代南アジアについては基礎ができてきたようだ。しかし、それ以外は正答率が下がるのが気になる。特に、ここ数年しばしば登場するようになった朝鮮史の学習が進んでいない。朝鮮史だけでなくアフリカ史、中央アジア史、東南アジア史の学習も足りないようだ。こうした地域の近現代史はさらにできていない。さらなる学習の必要性を受験者に感じてほしい。



II. 大問別分析

第 1 問 世界史上の宗教

朝鮮史と東南アジア史を押さえよう。

第 1 問の得点率は 55.8% と最も高かった。最も正答率の高い問題もこの大問にあった。まず特筆すべきは、モーセの「出エジプト」を答えさせる [5] の正答率が 87.4% と今回最も高かったことである。古代史の基本が押さえられている証左であろう。一方、光緒帝の戊戌の変法を答えさせる [8] が今回最も正答率が低く 27.0% であった。近現代史まで学習が及んでいないと思われる。さらにここでは世宗を李成桂と混同した受験者が 35.5% いた。これは朝鮮史の基礎中の基礎であるから朝鮮史を学ぶ必要性は高いと言える。キリスト教の公会議を問う [9] の正答率 65.3%、中世のヨーロッパと中国を問う [2] が 66.8%、唐代の社会を答えさせる [6] が 55.8% という結果から、ヨーロッパと中国史は近現代以前の学習は基礎固めができたものと考えられる。南アジアでは、マウリヤ朝のチャンドラグプタを答えさせる [7] は 66.5% であった。さらにアンコール=ワットについて問う [3] も 59.3% で満足できるものであった。残念なのはインドネシアの強制栽培制度を答えさせる [1] が 36.9% であったことである。東南アジアの近現代史の基礎であるから、確認しておいたほうが良い。もう一つ残念だったのはインカ帝国滅亡の時期を答えさせる [4] の 39.6% である。コロンブスのサンサルバドル島上陸が 1492 年であるから、ピサロによるインカ帝国の滅亡が 16 世紀であることは類推できるのではないだろうか。

第 2 問 世界史上の経済政策

グラフ問題に慣れ西アジア史を補強しよう。

第 2 問の得点率は 48.2% であった。過半数が近現代からの問題であったから、現段階ではこの結果はまずまずと言える。中世中国の [10]、[11] がおのおの正答率 59.8%、53.1% という結果は、中国史の基本が押さえられてきたことを示すものであろう。

逆に、大問中最も正答率が低かったのは[12]の29.6%であった。バグダードを陥落させ、イル＝ハン国を建国したのはフラグでありパトゥではない。この誤りを51.7%の受験者がしていた。古代以外の西アジアの学習が足りない証左であろう。ロシアのアレクサンドル2世を答えさせる[14]の43.1%、大躍進の時期を問う[17]の42.0%、ソ連の第1次五カ年計画を答えさせる[16]の49.5%は学習が近現代まで及んでいないためと思われる。逆に、2002年～2012年の為替相場のグラフを読み取る[15]の59.5%はうれしい誤算であった。アメリカ合衆国の共和党政権について問う[18]の51.4%もこの時期としては健闘したと言える。イギリス東インド会社の活動について問う[13]の53.6%は数字的には問題はないが、18～19世紀をリードするイギリスについての問と考えると不満が残る。

第3問 人間と動物の関わり

植民地化以前のアフリカ史を学ぼう。

この大問の得点率は全問平均より低い47.9%であった。第3問で最も良かったのは近世ヨーロッパの経済の中心を答えさせる[25]の68.2%であった。次いで三圃制を答えさせる[24]の56.7%、ゲルマン人の建国を問う[23]の55.6%であった。ヨーロッパ史は、近現代を除くと基本は押さえられたようだ。少しひねってスキタイと同時期の出来事を問うた[19]は40.5%であった。スキタイについて現存する最古の文献は、ヘロドトスの『歴史』で、ペルシア戦争を主題とする。アクスム王国を答えさせる[22]が33.4%と大問中最も低かった。アフリカ史を学習する必要がある。またサマルカンドを問う[21]も34.4%と低かった。中央アジア史でサマルカンドは重要な都市であるから残念な結果であった。トマス＝モアと同時期の出来事を答えさせる[26]の42.4%はやや難しいが、トマス＝モアがヘンリ8世の離婚を批判して殺されたことを知っていれば、解答できたと思われる。オーストラリアについて問う[27]の42.9%も不満が残る。ニュージーランドの先住民がマオリで、オーストラリアの先住民はアボリジニーとこの際覚えておこう。古代中国の年代整序問題の[20]の正答率50.7%は、中国史の基本中の基本であることから大きく不満が残った。

第4問 世界の一体化、グローバル化

近現代史に積極的に取り組もう。

第4問の得点率は42.8%と全大問中最も低かった。原因は、近現代史が半数以上あったことである。ドル＝ショックを答えさせる[35]の正答率は29.0%と大問中最も低かった。第2次中東戦争は1956年、ドル＝ショックは1971年である。次に低かったのはマラーター戦争を答えさせる[32]の29.3%である。ロシアとイギリスを混同した受験者が36.7%と正解者より多かった。逆に、大問中最も良かったのはカルロス1世とルターを答えさせる[28]で、正答率62.4%であった。次いでヴァスコ＝ダ＝ガマを答えさせる[29]で54.6%であった。ヨーロッパ史の中世、近世は安心できる結果である。一方、近世アジアの大帝国を問う[30]は37.8%であった。サファビー朝の滅亡を誤った受験者が38.1%とやや正答者を上回った。近世アジアの大帝国はいずれも頻出である。積極的に学習されたい。ドンズー運動を答えさせる[34]の39.5%とナセルのスエズ運河国有化を答えさせる[36]の35.9%は学習がここまで及んでいないためであろう。近現代史でありながら[31]の正答率は52.4%であった。アヘン戦争が異国船打ち払い令廃止に結びついたことは中学校で既習であり、そのためであろう。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆センター試験の形式に慣れよう。

何よりもセンター試験の形式や内容によく慣れることが重要である。実戦的な演習を積んでいくことで、よりなじんでいくことが得点力アップにはとても効果的である。

◆現時点の学力を正確に把握しよう。

どのような模試であれ、模試は受けた後の活用が大切である。模試の結果を分析して現時点での学力を正確に判断し、これからの学習計画にそれを反映させ、効果的な学習に努めよう。